

お釈迦さまは、今から約二五〇〇年前、ヒマラヤのふもとにある、ルンビニーという村で、お母さんである摩耶<sup>まや</sup>夫人から生まれました。お釈迦さまの誕生には、後に創<sup>のち つく</sup>られた物語がいくつもお経に残されています。その一つを今日は紹介しましょう。

お釈迦さまは、お母さんのお腹から生まれるとすぐに、東西南北の四方<sup>しほう</sup>に向かって、七歩ずつ歩きました。そして右手を上げて天を指差し、左手を下げ地上を指差すと、大きな声で、  
「天上<sup>てんじょう</sup>天下<sup>てんげ</sup> 唯<sup>ゆい</sup>我<sup>が</sup>独<sup>どく</sup>尊<sup>そん</sup>」（わたしこそは、この世に類<sup>たぐい</sup>なきものである）  
と宣言されました。

このお話は、お釈迦さまの偉大<sup>いだい</sup>さをあらわすために後代に創作された物語です。しかしこの物語には、お釈迦さまの大切な教えが込められているのです。

「天上<sup>てんじょう</sup>天下<sup>てんげ</sup> 唯<sup>ゆい</sup>我<sup>が</sup>独<sup>どく</sup>尊<sup>そん</sup>」（わたしこそは、この世に類<sup>たぐい</sup>なきものである）

お釈迦さまがこのとき発<sup>はっ</sup>した言葉の意味は、「この世界の人々は、誰もが皆、平等<sup>とうと</sup>に尊<sup>たぐい</sup>い存在である」ということです。

自分が尊<sup>たぐい</sup>い存在であるならば、同じように自分以外の存在も尊<sup>たぐい</sup>いのです。自分の存在の尊<sup>たぐい</sup>さに気付いたのならば、同様に自分以外の人々の尊<sup>たぐい</sup>さにも気付かなければならないのです。

そして人と人との関係を築くことが大切な事だとお釈迦さまは示しました。人はだれでも、自分を否定されると悲しみを感じます。しかし、認められることは、だれにとっても喜ばしいことでしょう。人と人とが認め合うことによって、素晴らしい関係を築くことができるのです。存在を認め合うことの大切さを、お釈迦さまは説かれたのです。

存在を認め合う世界の素晴らしさに気付ついたのでしたら、誰にでも少なからずある、自分さえ良ければという独りよがりの生き方も変えていくことできるのではないのでしょうか。

四月八日には、多くの寺院でお釈迦さまの誕<sup>たんじょう</sup>生を祝います。きれいな花々で飾られた花御堂<sup>はなみどう</sup>に納められた小さな誕<sup>たんじょう</sup>生<sup>ぶつ</sup>仏に、甘茶をかけて祝うのが習わしとなり、今も続けられています。

右手で天を、左手で地上を指差す小さな誕生仏に甘茶をかける時、私たち一人一人の存在の尊さに、改めて気付いていただきたいのです。

— 終 —